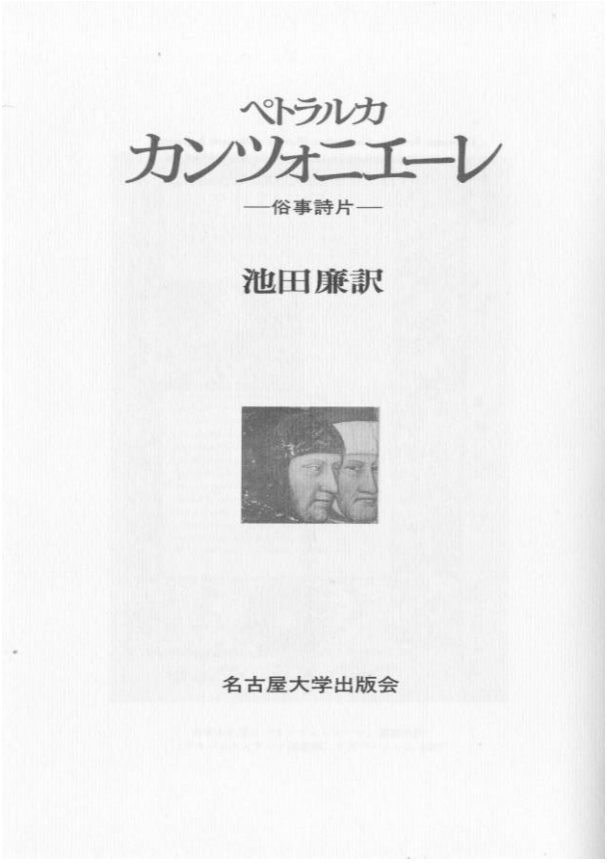
ペトラルカの詩心

付：ペトラルカのコンスタンティヌス大帝観

池田　廉



ペトラルカの詩を読むのには、できれば丘の上のモミの本かブナの木の大陰で、あるいは松林の中で腰をおろして読むのがいちばんいいと言ったひと（Massimiliano, Boni）がいる。その心は、瞑想に耽るように、読書三昧の心境で読むに限るということらしい。私の発表は、たまたま昼下りのことでもあり、午睡の瞑想を楽しみながら聞いてくださっても結構である。お断りしておくが、発表は、方法論的に語学的な視点と文学的な視点とを絡み合わせた、ごく平凡なものに過ぎない。ただ結論だけは、私としてはオリジナルなものだと信じている。

たまたま、『カンツォニエーレ』の訳稿の整理をしている過程で、これまで解釈の上でいろいろと問題のある個所を見直していた。その中で、最後まで気にかかったのは、ソネット 138 の問題、この最後の 3 行節の解釈のことであった。他の、7、8 箇所については、ただアレゴリーの解釈をめぐる問題であった。だが、このソネットについては、語学上のことと、アレゴリー解釈との両方に及んでいた。

お手元に、エイナウディ版(Testo critico di G. Contini, annotazioni di Daniele Ponchiroli, Einaudi 1964)を用意した。スペースの関係で注の少ないものを選んだ。それでも、この箇所についての、現代の代表的な読み方が示されている。「今となってはコンスタンティヌス大帝はお前(アヴィニョンにあるローマ教皇庁)を助けに戻ってはこない。彼(コンスタンティヌス)を収容している地獄(の苦しみ)を受けるがいい。ただしこの 1 行の解釈は不明である」。

キアーリ版(Alberto Chiari, Mondadori, 1985)では、本文はそのままで、「解釈のなかなか難しいことば。恐らくキオルボリ注が先人の例にならい推論したとおりであろう。コンスタンティヌス帝は自分の寄進のこうした悲しい結末を見るために、帰ってはこない。それどころか、その始末のむくいで、彼がいる地獄を身に蒙るがよい。ここでの sostiene は ritiene(収める)のこと。なお、ペトラルカの『牧歌』6、と地獄編 19、115-117 参照」とある。

この箇所は、古くから注釈者が頭を悩ませたところである。現代の注釈書は、すべて解釈不明として、もっぱら、ピエレッティ以後の説に従っている。従って、記述量からは、カルドゥッチ版やキオルボリ版に較べていたって簡略であり、またルネサンス期を代表するヴェルテッロ版やジェズアルド版の方が行き

届いている。

この 2 行についての、私の最初の疑問は、ここでのコンスタンティヌスは、たた換喩 metonimia として使われたのではないかということであり、もうひとつは、文中の che はじつは perché の che ではないかということであった。私なりの読み方は、後で説明する。

この疑問から出発して、それでは、古い注釈書から今日まで、どう解釈されてきたかを、調べてみようと思った。つまり、私が抱いた解釈と似たものがすでにあるのではないかと。

すると、ルネサンス期の注釈書は、その時代背景を反映して、かなりリアリスティックな読みに傾くことが分かった。

Vellutello の注は、今日のように語学的ではないが、こうあった。「コンスタンティヌスは、お前(堕落した当時の聖職者)の仲間に加わろうとしても、戻ってはこれない。もしも戻ってくれば、彼の寄進がどう使われているかを見て、教会から寄進を取り上げることだろう。だが戻れない以上、“キリストがこの惨めな世界を取り上げるべきだ"」。

Gesualdo では、「今ここにコンスタンティヌスは戻ってこない。それは、あたかも詩人がコンスタンティヌスの戻ってくるのを願うかのようである。つまり、彼が戻ってくれば、彼の与えた寄進がどれほど悪の原因となってしまったかを知って、後悔し、無効にしようとさえ努めるだろうから。もっとも何事も変わることはないであろうが。さらに付け加えて、Ma, コンスタンティヌスは戻れないので、また戻ってきても現状の堕落した状態を変えることはできないであろうから、キリストがそれ(つまりこの惨めな世)を支配している(”sostiene” は “regge”) この世を取り除いておくれ」と注解している。

なお、Gesualdo は、当時の別の読み方として、che 以下の、i1 をこのような vituperio(恥辱)を sostiene、つまり porta(もっている)悲しい世をキリストが取り除いてくれ」とも紹介している。

つまり、コンスタンティヌスが戻るとか、戻れないとかの、現実的な読みが、字面のままの読み方が顕著である。これに対して、近代の版の中では、ひとり Zingarelli 版だけが、「ここは、ある人たちが言うように、コンスタンティヌスは彼の寄付の悲しい結末を見に、そして寄進したものを取り戻しにやって来る

というのではない(堕落した教会はそれを恐れていたのであろうが)。そうではなく、ペトラルカが言いたかったのは、ひやかし半分に、”Il P. dice con scherno che un altro Cos. non verrà a scorrerla piú.” もう一度コンスタンティヌスが現れて、世俗の財産などお前にくれないぞと言っているのだ」、と明確である。

それで、私が考えていた読み方、つまり「コンスタンティヌスその人ではなく、コンスタンティヌスのような人は、お前に金を恵むような人物は来ない」という風刺的な読み方は、すでに先を越されていることが分かったわけである。もっとも、過去の人物であるので、 現実的といい、風刺的トーンと取っても大きな違いがあるわけではない。だが、それを調べているうちに、奇妙なことにVellutel1o版（1525)とGesualdo 版(1531)との間で本文の違いがあることに気付いた。すなわち、前者では ch'l sostiene の前に、“ヴィルゴラ”があり、Gesualdo版ではそれがない。つまり、私の第 2 の疑問、che が perché ではないかという疑問に、適当な異文 variante が見つかったわけである。そこで、そのことを少し調べてみると、次のようであった。

本文:segno di pausa (virgola)

(a) con la virgola : Il Bembo, 1502 (Aldo, forse derivazione del Cod. Vat. lat. 3197), Il Vellutello, (Venezia, 1525), Sebastiano Fausto da Longiano (Venezia, 1532), “Opera omnia” (Basilea. 1554), il Muratori (Modena, 1711). L'Albertini (Firenze, 1832).

(b) senza 1a virgola: codice Vat. Lat. 3195, codice Chigiano Vat. Lat. 176. Bernardo da Monte Alano da Sena (Venezia, 1484). II Gesualdo (1531), II Leopardi (1826), Il Marsand (Padova, 1819-20), 1l Riguttini (Milano, 1896), I1 Carducci (Livorno, 1876), Il Chiorbo1i (Milano, 1924).

* S. Congregazione dell'Indice (禁書目録): Indicetto Primo de’libri proibiti, 1564, Firenze, Giunti, 1564, に *Alcuni importanti luoghi tradotti fuor dall’ Epistole latine di M. F. P. e con tre Sonetti suoi.* が含まれる。後に Volpi 版（1722）が復活。

いま決定稿の中の本文の問題は後回しにして、ここで、私の読み方を説明しておく。私の理解はこのようなものであった。

「破廉恥な娼婦―教皇庁か高位の聖職者―よ。お前はどこに(誰に)望みを託し

たのか?/お前にへつらう取り巻き(聖職者)にか? 誤って生まれた/財宝にか? ああ今となっては、コンスタンティヌス大帝は戻ってはこない。/それどころか、彼(コンスタンティヌス)がこの悲惨な世界(教皇庁)を取り除く(刈り取る)がよい(ことを私は希う)。なぜなら、キリスト(第 8 行、天主)がその世界を耐えて(苦しんで)いられるのだから」。

この解釈に立って、語学的に、以下の点を調べることとした。

1) 語彙レベルで、togliere と sostenere の用法をチェックすること 。

2) シンタックスのレベルで、相関的な non..., ma の用法をチェックすること。

3) 同じレベルで、io prego che *cong. ivo,*または che *cong. ivo,*の主文と che(理由の接続詞)をもつ従属節の構文を調べること。なお、本文に類似の、主文と従属文との主語が異なるものを求めること。一方、文学的側面から、イメージの面で、「悪く撒いた種を、撒いた本人が自分で刈り取る」という例文がないかを調べることとした。

その結論に触れる前に、ジェズアルド版以後、近代までの解釈史をもう少し補っておきたい。このソネットは、前述のごとく「禁書目録」との関わりのために、解釈史の山に空白の一時期が生れた。おそるおそる作品に復活させたムラトーリの版では、注釈は皆無である。そのため、マルサン版(1819-20)とレオパルディ版(1826)が重要な意味をもつ。レオパルディ版は、マルサン版を底本とし、いずれも「ヴィルゴラ」を欠く。本来、マルサン版はヴェルテッロ版を参考にしているはずなのに、このソネットについては、なぜか「ヴィルゴラ」を欠いていた。この「ソネット・バビロネーゼ」については、他の版を利用したのであろうか。さて、レオパルディは、この解釈にかなり腐心したらしい。彼は、初版(1826)の注釈でこう言う。

「思うにペトラルカの言おうとしたのは、もはやコンスタンティヌスはこの世に戻ってこない。そしてお前に贈ったものを再び持ち去ることもない。だが、お前の scellerati modi 恥知らずな状態を耐えている、惨めな世界は、彼自身がお前の恥知らずな状態を取り除く torli via ように配慮する(provvegga)がいい。思うに、そこまで言ってはいないが、そう言いたかったように思う。なぜなら、本当のところ、これらのことばは、なんの意味ももたないから(perché in verità

queste sue parole non significavano nulla)」。

ところが、再版では解釈を一変させた。たまたまレオパルディが知り合った、一人のフイレンツェの文学青年が意外な説を述べたのを紹介して、こう記した。

「今やコンスタンティヌスはこの世に戻ることはできない。戻ってきたなら、そうしたと思うが、差しだした財産を返してもらうことができない。だが、大いなる非道（scelleratezza)を支えている、このつまらぬ世を、tolga, cioè pigliasi queste fiche このいちじく(卑猥さ、低俗さ)を自らの身に受けよ」。 青年は、ダンテ地獄編（25)にある、盗賊 Vanni Fucci のエピソードの表現、“togli, Dio, ch'a te le squadro! “（神よ、お前はこれを取るがいい。お前に差し出しているんだぞ)の通俗な表現の“togliere''の用法をここに適用しようとした。そのことが、わたしの見るところでは、今日まで尾を引いている。つまり、togliere=pigliare, avere の用法の適用である。もっとも、紹介したレオパルディは必ずしも全面的にそれを認めたわけではないので、古注の読みをも付記している。

「今やコンスタンティヌスは戻ってこない。また戻れもしない。“ ma abbiasi e godasi quel che tu sei, tolgasi su in pace le tue nefande opere, il mondo tristo che ti comportale, che non ti spoglia delle ricchezze, mal nate.'' 「だから、彼は極悪な所業を静かに受け入れてほしい。お前(聖職者)にそうした悪業をもたらすこの悲惨な世界を。お前から悪く生じた富が取り除かれるように」。

なお、その直後の Biagioli 版(1823)では、che 'l sostiene を chi 'l sostiene と読み変えて、 Vellutello の旧説と折衷させて、「コンスタンティヌスが戻って来ない以上、この世を支えているキリストが、この世を除くがよい」と取っている。

ところで、レオパルディ以後、今日の漠然とした解釈にもっとも影響を与えたのは、Pieretti (*Nuova interpretazione di alcuni passi oscuri del Canz.*, Ariano, 1889)説である。

彼はこう解く。「今ではコンスタンティヌスは、自分の寄進のこうした悲しい結末を見に戻ってはこれない。いや、その寄進の報いで、今いる地獄を abbiasi 自ら享受するがいい」。彼によれば、che は in cui, dove であり、sostiene は ritiene, alberga だという。カルドゥッチは、この説を紹介して「一見奇妙に思

うかもしれないが、interpretazione osservabile であるとした。

本題の調査に戻って、結論は次のようになった。

1)ペトラルカの用語は「モノ・リングア」と呼ばれるように、ごく限られた上品なことばを使い、おおかたその時代の本来の意味で使っていると思われる。“togliere (tollere, torre)"の語彙については、約 50 の例文がある。おおかたが portare via, levare の意味で使われている。ひとつ例を挙げれば、”quella ch'a tutto 'l mondo fama tolle'' (全世界から名声を奪うひと) (243-6)のように。

他方、“sostenere"は約 20 の例文中、 sopportare, soffrire で用いられている。一例に、”L'alma, che tanta luce non sostene" (大いなる光に耐えられぬ心は)。現代の版の中で綿密な注をもつ Zingarelli 版では、最後の行を、ピエレッティ以後の伝統的な、「彼 (コンスタンティヌス) が苦しんでいる悲惨な世界(地獄)を、彼自ら味わうがよい」としている。しかも、Bisogna leggere come io ho fatto e intendere (私の理解したとおり、読むべきだ)とさえ言い立てている。しかし、“sostenere"は”soffrire dolorosamente", “patire"といった強い意味をもち、このことばを“albergare”などと読むのはおかしい、としている。さすがに言語学者というべきであろうか。

2)“non..., ma(=anzi)”この相関的な語法については、“Non prego gia ... che mesuratamente il mio cor arda, ma che sua parte abbi costei del foco (この胸が程よく燃えるなどを願いはしない。それどころかあの女が情炎の一端を味わうを:65-12-14) ¨ がある。

3)主節が願望の *cong.ivo,*または命令法にして、従属節に“che” (理由の接続詞)をもつ構文について、幾つかを拾いえた。その代表的なものに、“Tengan dunque ver me l'usato stile/ Amor, madonna, il mondo et mia fortuna, / ch' i' non penso esser mai se non felice'' (愛とマドンナと世間よ、わが宿命がつねに変わらぬ流儀で迫りくるように、なぜならこの身を少しも不幸と思わぬゆえに:229-9-11)及び、“Cercate dunque fonte più tranqui1lo,/ che 'mio d'ogni liquor sostiene inopia" (わが泉はすべての水滴の渇望に苦しむがゆえに、より静かな泉をこそ求めよ: 24、12-13)などがある。

さらに、che の原因節で、次の従属文を見出したことは私には印象的であった。 “Che 'l ciel non vole"(「天主は希まれぬゆえ:70-25-27)。“che 'l ciel di più

non volse・・・（天主はこれ以上希みたまわわざりしゆえ:270-93-94)。なぜなら、この箇所の、“che (il cielo) lo sopporta'' (天主はこれを耐えたまうゆえ)と、かなり似通った心理構造に思えたから。 なお、“sostenere''の語に合う目的語は、「地獄」とか、「死」とかであろう。ここでの “il mondo tristo"は比喩的に地獄と取ることができる。同じソネットの第 2 節で、「この世」を “di vivi inferno" (生きる者の地獄:138-7)と喩えている。また、“ne vorrei rivederla in questo inferno（この地獄《=生》の中での再会を希わぬ:345-10)とも。他方、「人生」は「死」とも喩えられる。“questa morte, che si chiama vita'' (人生と呼ばれるこの死:216-11)。ダンテは “sostenere''を proteggere, sopportare, perdurare などの意味で用いているが、一例に、“la morte ch' el sostenne（キリストは死を耐えたまい:Par.21-135)がある。

次に、文学的イメージ「あやまって撒いた種は、自分が刈り取るがよい」のイメージについては、『俗事詩片』の中に、類似の例文を見出した。

“L'esca fu 'l seme ch' egli sparge et miete'' (彼が撒いては刈り取る種:181-5)と、”Di bon seme mal frutto/mieto: et tal merito e chi 'ngrato serve'' (わが刈り取ったものは良き種が生める悪しき果実:360-108-9)。

最後に、手稿中の「ヴィルゴラ」の問題に戻るが、厳密には segno di pausa (休止符号)「プント・フェルモ」(点)、か「プントとヴィルゴレッタ」(斜線の上に点)ないしは「コンマ」(斜線と点)などがあるかの問題であるが、たとえば、先に挙げた”Cercate.... che...''の、あきらかに原因節の構文において、Codice Chigiano にも、Codice Vat. Lat. 195 にもあったが、他方、同様の、che l’ Ciel non volse(170-27)について、また“che l' Ciel di più non volse" (270-94)については、Codice Chigiano にはなく、決定稿においても前者にはなく、あとの方もはっきり読みとれなかったが、なさそうであった。

すなわち、“che" = “perché " の読み方は休止符号のあるなしに関わらず、可能であり、しかも、決定稿の中での、このソネットの筆は作者の自筆箇所ではなく、筆写生ジョヴァンニの手になるところである。結論として、私の読み方をもう一度繰り返せば、「君には残念だろうが、コンスタンティヌス帝は、君にもう一度富を与えに、帰ってはきてくれない。彼は君の最後の希望であろうが。なぜなら後悔しているのだから(修辞上、間接的な≪頓呼法≫、≪強い皮肉≫)。

いや、帰ってこないどころか、彼がこの極悪非道な世を取り除いて欲しいと、私は願っている。なぜなら、それは彼の責任なのだから。思うに、キリスト(天主)はそれを願わないどころか、耐えていられるのだから」となる。

これを従来の解釈と比較すると、第 1 行では、Zingarelli に近い。第 2 行では、che 以下の主語が「天主」であることは古注と共通であって、ただし“Sostenere”を”Soffrire”と取る 見方では Zingarelli と類似となる。だが、che を perché と取っての解釈は初めてであろう。また、tolga を「取り除く」の意味で解釈するのは、古注やレオパルディ初版と共通するが、その主語が古注のようにキリストでなく、コンスタンティヌスとすること、そこに、「悪い種を蒔いた人は本人がそれを取り除くがよい」とのイメージを重ね合わせことが、創意である。

私はこの立場に立って、 解釈史の上で、ある歪みが生じたのは、この作品が一時期、『詩集』から削除されていたこと、そして、近代の諸版が、「ヴィルゴラ」のないテキストになじみ、深い疑問をさしはさまずに、関係代名詞、あるいは関係副詞的読み方を、読みの出発点としたことによるのではないかと思っている。なお、ラテン語テキスト中の問題、つまり *Bucolicum carmen*『牧歌』と『宛名のない書簡集』の山の記述、つまり前者の中での「ペトラルカはコンスタンティヌスを地獄に追いやった」“eternum gemet ille miser“との整合性(それゆえ、「地獄にいる彼」)については、別に報告しようと思うが、今は時間の都合で割愛する。ただし、ひとこと付け加えれば、ある近代の版の注に、「このような 1 行で、詩人がコンスタンティヌスは地獄にいるといった、重要な判断を示すのはおかしい」との見方があり、私も同感である。なお、ダンテや初期の人文主義者は、彼の寄進が逆効果を生んだことは非難しているが、その意図は善意から発したものとし、またおそらくは、コンスタンティヌスのキリスト教への改宗の意義、ミラノ勅令の事蹟などが記憶にあって、天国篇のユピテル(正義)の天に祝聖したのだと思う。ペトラルカだけが、彼を地獄に置くという判断を厳密に下したとは思いがたい。まして、この 1 行の中で、彼の用いない語法を、珍しく使って、そう呪ったとは思えない。

なお、人文学者ロレンツォ・ヴァッラの、「寄進状偽書説」の発表後の古注では、たとえばジェズアルド版では、「寄進」の内容は、中世に広く信じられてい

たように、皇帝が、「ローマやイタリアや西のキリスト教世界」を寄進したわけでなく、たんに、「貧者を助けるために、教会の外装の費用」を寄付したに過ぎない、となっている。

補１：「実を刈る」のイメージ

『聖書』の用例

“Chi semina iniquità, raccoglie sventura e tutta la sua fatica finisce in niente''「悪をまく者は災いを刈り、その苦労は全て無に帰し（その怒りの杖はすたれる）」*Proverbi*『箴言』, XXII, 8。“Ognuno mieterà quello che avrà seminato; e quindi chi semina nella sua carne, dalla carne mieterà la corruzione”「人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。すなわち、自分の肉にまく者は、肉から滅びを刈り取り（霊にまく者は、霊から永遠の命を刈り取るであろう）」『ガラテア人への手紙』*Ai Galati*, VI-8。

ダンテの用例。

“ Di mia semente cotal paglia mieto''「わたしは自ら種を蒔き、その藁を刈り取る」Purg. XIV-85（ギベッリーニ党のグィード・デル・ルーカについて）。

ペトラルカのコンスタンティヌス大帝観

ペトラルカのコンスタンティヌス観を知る上で、基本的な資料となるものは、『牧歌』(6)と『宛名のない書簡集』(17)とである。他に『晩年書簡集』(3-6)の中に、同時代のコンスタンティノポリスの繁栄について触れた記述があるが、直接皇帝を論じたものではない。前者の資料を紹介すると、華美を好んだと言われるクレメンス 6 世(在位:1343-52)が、卑猥な羊飼い Mizione の名で登場する。彼は悪女にのめりこむ。そして、もう一人の羊飼い Coridon(コンスタンティヌス大帝の寓喩)から贈られた鏡(寄進?)で自分の姿を映してみる。するとその時、羊飼い Panfilo(つまり聖ペテロ)が、次のように言う。「“宮廷の羊飼いたちに、最初に悪の贈り物をした男が、永遠に呻いている" “ Aeternum gemat ille miser pastoribus aulae/ Qui primus mala donat dedit"」。

後者の資料は、直接、コンスタンティヌス帝を論じたものである。

「ああ金遣いの荒い愚かな君主よ！お前は、かつてどれほどの努力で築いたローマ帝国をこうも簡単に崩壊させようとしたのか。先祖が蓄えた財産を浪費するのは、軽薄な若者のすることである。彼らが獲得した苦労や手だてについて、明らかに無知なのだ。窮乏や労働への追憶が、果てしない浪費への、確かな抑制にならないとすれば、無知な人々である。お前はすでに大人のくせに、そうしたことをしてしまった。かつてのお前はどこにあったのか。もしもお前が度量の大きさを示したいのなら、お前は自分の物をこそ惜しみなく遺すべきだった。自らの物を与え、ローマの皇帝の遺産は、後継者にそのまま残しておくべきだった。その財産は、じつはお前が行政長官として受けたものだった。他人の手によって、昔は謙虚な、今日は横暴な人たちの手で治める国の行政が、どのようにしてお前の手に届いたかを、本当にお前が自覚していたか否か、わたしは知らない。この事実は、いささかの鄭重さでこう説明された。“ああローマよ、かつては君主の最上の者がそなたに仕えた。今日は、奴隷の中の奴隷が、そなたを治めている"。もし言うことができれば、君には他にもいろいろと言いたいことがある。だが。君が聞いてくれるかも分からないし、かりに聞いてくれるとしても、もう無駄である。お前は、かりに戻ってくるとしても、変える

ことのできない行動を犯してしまった。復興者ならば、破壊者よりも創設者の方に似る必要があるのだ」。

ところで、この僅かな資料、しかも「牧歌」という寓喩的なジャンルで、あるいは「宛名」を伏せた手紙での激越な文体といった資料を通して、この皇帝をペトラルカがどう評価していたかの、判断を適確に把みとることはできない。

ここで、同じ皇帝に対するダンテの見方を取り上げて、比較検討してみたい。ダンテの資料には、『神曲』と『帝政論』(2-12)中の記述がある。しかも、こちらの表現はかなり明確である。

その視点を要約してみよう。

1) コンスタンティヌス帝は、死後に天国に祝聖されている。もっとも、彼のよき意志(寄進)は、結果的には悪を生んだ。「その次ぎなる者は、法律と自分自身でローマを羊飼いに譲り、ギリシャ人となった。それは善意から出たが、結果は思わしくなかった。善行から生じた禍いがたとえ全世界を滅ぼしても、彼はそれが自分を害するものでないことを知っている」(『天国篇』20-55-57)。

「ああ幸ある民よ、ああ栄光あるイタリアよ、もしも汝の帝国を弱体化した人が世に生まれなかったならば、あるいは、彼の敬虔な意図が、その帝国を欺かなかったならば！」(『帝政論』2-12)。

2) 皇帝がローマ帝国の首都をローマからビザンティウムに移したのは、誤りであった。「コンスタンティヌスは、天の運行に逆らい、その鷲をさしむけた」(『天国篇』6-1-2)。

なお、以上のダンテの思想を論じたものに、次の論述がある。 古い注釈者 Bembenuto Rambaldi da Imola は、『天国篇』(6-1-2)の箇所と関連して、「ダンテは、ローマ帝国の帝政がカエサルの下で確立し、アウグスティヌス帝の下で拡大し、トライアヌス帝の下で復興したと考え、その法律的根拠はコンスタティヌス帝の下で発見され、ユスティニアヌスの下で秩序づけられた、と信じている」(ハンス・バロンの研究『初期イタリアルネサンスの危機』)。

現代の研究者 E. Peruzzi はこう論じている。

「ダンテは、コンスタンティヌス帝が、善を目的としつつも、運命的な過ちを犯した、とする。つまり真の罪を問い糺したわけではない。そのために救済されているばかりか、ユピテル(正義)の天界の、聖霊の座を占めている。神秘

的な《ワシ》の目のアーチの最高に位いしている」(『ダンテ百科事典』中の「コンスタンティヌス」の項)。

また、B. Nardi によれば、寄進の有効性について、同時代にすでに盛んに議論が行われた。

「ローマ教会の法学者は一致して擁護し、その反対にオットー3 世を初め、皇帝側の法律家は異議を唱えた。それが帝国の普遍的権威の法的権限を弱めた点を問題視した（・・・帝国の法律は、皇帝よりも優先権があるわけで、彼に与える権限はなかったのだ)。他方、異端者や宗教改革者は、それが教会の堕落の原因となったとした。・・・教会はそんな汚らしい贈り物受け入れるべきではなかった、と」(『 ダンテと中世文化』11 章)。

要するに、コンスタンティヌスが貧者を救済する手段として、寄進をした誠意ある意図は評価しつつも、それが悪い結果を招いたことを非難した。そして正義ある皇帝の事蹟を称えて、天国に祝聖した。ダンテとは異なり、ペトラルカは、コンスタンティヌス帝について、彼が天国にいるか、地獄にいるのかについて、明言はしていない。ただあたかも地獄にいるかのような寓喩を『牧歌』の中で用い、「永遠に呻く」と語っている。この“eternum"の語にしても、文字どおり「永遠に」の使い方もあれば、“ sempre''「ずっと」の場合もある。もしその見方が正しければ、ダンテとは正反対の見方となる。ただし、善意の寄進が悪い結果を生んだとの認識ではほぼ共通していたように思われる。それも、ダンテの表現が冷静であるのに対して、ペトラルカの場合は、『宛名のない書簡集』の中で、激しく風刺的であり、あたかも皇帝が眼前にいるかのように、非難している。

ところで、中世に広く信じられた、いわゆるコンスタンティヌス寄進状 Constituto は後世に、15 世紀の人文学者らによって、偽書と断定された。この寄進状は、ダンテ時代の見解では、皇帝は、ローマ帝国の大部分、言い換えれば、ローマとイタリアと西欧を、教皇シルヴェストゥロス及びその後継者に譲る証であった。文献学的に記録の偽作であることを実証しようとしたのは、Lorenzo Valla であり、Nicolaus Cusanus や Rinaldo Pecock であった。ヴァッラは、その書 *De falso credita et ementiva Constantine donatione declamatio* (1440)で それを論じた。もっとも、この書物は偶然の産物であった。彼は仕え

ていたアルフォンソ公のために、論争の相手エウゲニウス 4 世の論拠をたたくために書いた。いわば、ダンテの反聖職者ふうの論調にならって、教皇庁の世俗権力への介入を批判したものであった。しかし、その批判の書は、1559 年の「禁書目録」に含まれてしまった。この論争は 18 世紀まで続き、決着したのは、19 世紀のことであった。ことに当時の政治改革派からは、称賛された。

なお、古注ジェズアルド版は、すでにヴァッラの批判的論点を消化していたと思われるが、こう書かれている。「いかなる異教の歴史家もキリスト教の歴史家も、オロシウス、エウロピウス、パウルス・デイアコヌスも、コンスタンティヌス皇帝の事蹟を慎重に記述した人々はみな、皇帝が莫大な寄進をしたなどと一言も書いてはいない。・・・僅かばかりの費用以外には。それは、たくさんある教会に金の装飾を施したり、聖職者が教会を維持することを可能にする程度のものでしかなかった。・・・さらに皇帝は、娘や独身の男が遺言状を作ることをも認めた。もし望めば聖職者さえも、遺産の一部を残しうるとした。おそらく教会の財産が増えると思ってのことであろう」。

㊟コンスタンティヌス大帝(288?-337:在位 306-337)

父コンスタンティウス 1 世の後継、324 年帝国全体の支配者となる。キリスト教信者の迫害を中止して、その信仰を公認する(313 頃、「ミラノ勅令」)。伝説によれは、死ぬ間際に教皇シルヴェストゥルスの手で洗礼を受ける。ローマのジョヴァンニ・ラテラーノ教会の泉（洗礼盤)にて洗礼を受け、ライ病を癒したとか。コーラ・ディ・リエンツォは、同じ泉で洗礼を受けた(ウイルキンズ『ペトラルカの生涯』)。

（これらは、筆者から提供された原稿（執筆時期不明）と資料をこちらでまとめたものである。2019 年 7 月 編集士記）

資料 I　Francesco Petrarca, *CANZINIERE*, Testo critico e introduzione di Gianfranco Contini, Annotazioni di Daniele Ponchiroli, Einaudi 1982.

138

Fontana di dolore, albergo d'ira,
scola d'errori et templo d'eresia,
già Roma, or Babilonia falsa et ria,
per cui tanto si piange et si sospira; 4

o fucina d'inganni, o pregion dira,
ove 'l ben more, e 'l mal si nutre et cria,
di vivi inferno, un gran miracol fia
se Cristo teco alfine non s'adira. 8

Fondata in casta et humil povertate,
contra' tuoi fondatori alzi le corna,
putta sfacciata: et dove ài posto spene? 11

negli adulteri tuoi? ne le mal nate
richezze tante? Or Constantin non torna,
ma tolga il mondo tristo che 'l sostene. 14

Co. Cf. l'introd. a 136.

Sonetto su 5 rime di schema ABBA ABBA CDE CDE. Particolarmente elaborato il sistema delle rime: l'assonanza fra A (*-ira*) e B (*-ia*) è accentuata dall'insistenza sul suono *r* delle parole in rima o vicine alla rima: d'iRa, eResia, Ria, sospiRa, diRa, cRia, miRacol fia, s'adiRa, poveRtate, coRna, toRna. Si aggiungano la serie ricca (con fenomeni di equivocità) "d'ira" : "dira" : "s'adira" (1, 5, 8); la coppia ricca "ria" : "cria" (3, 6) e quella allitterante "spene" : "sostene" (11, 14).

BIBL.: Ikeda.

1. FONTANA ... IRA: 'Sorgente, causa di dolore, sede di violenza' (oppure, alla provenzale, 'di crucci e tormenti': cf. ED, s. v. "ira"): cf. 114, 3 "albergo di dolor, madre d'errori"; per la struttura del v. cf. *Inf.* III 26 "parole *di dolore*, accenti *d'ira*". ❑ FONTANA DI: per

quanto il modulo sia diffuso (cf. 73, 43 e rimandi) non escluderei un influsso del Davanzati, *Ahi dolze e gaia* 2-5 "*fontana di valore* e di piagenza / ... / Formata fue di *Roma* tua semenza" (Santagata 1985[1], pp. 125-26).

2. SCOLA D'ERRORI: cf il "madre d'errori" di 114, 3 e *SN* 15, p. 215 "scelerum schola"; 18, p. 230 "contrario saltem magistra virtutum" . ❑ TEMPLO D'ERESIA: "nel tempio ... s'insegnava e disputava" (*Zingarelli*, che rinvia a *SN* 18, p. 228 "Future ibi vite spes inanis quedam fabula, et que de inferis narrantur, fabulosa omnia et resurrectio carnis et mundi finis et Cristus ad iuditium rediturus inter nenias habentur").

3. GIÀ ... RIA: detto della Chiesa (a cui tutto il sonetto si rivolge), 'santa, un tempo, quando aveva sede a Roma ("almam, sanctam et reginam urbem", *SN* 10, p. 198), e ora, in Avignone-Babilonia, falsa e malvagia'; per la clausola cf. 137, 2.

3-4. RIA ... TANTO: cf. *Inf.* V 64-65 "*... per cui tanto reo* / tempo *si* volse". ❑ SI PIANGE ET SI SOSPIRA: cf. *TC* IV 100 "Giace oltra ove l'Egeo *sospira e piagne*"; *Apc* 18, 9 "et flebunt et plangent se super illam reges"; 11 "flebunt et lugebunt super illam"; 15, 19 "flentes ac lugentes" (Pozzi 1989, p. 162).

5. FUCINA D'INGANNI: cf., in altro contesto, *Secr.* III, p. 170 "in hac ipsa civitate, que malorum tuorum omnium non dicam causa sed officina est"; cf. inoltre Boccaccio, *Dec.* I 2, 24 "quivi [nella corte di Roma] niuna santità, niuna divozione, niuna buona opera o essemplo di vita o d'altro in alcuno che cherico fosse veder mi parve, ma lussuria, avarizia e gulosità, fraude, invidia e superbia e simili cose e piggiori ... che io ho più tosto quella per una fucina di diaboliche operazioni che di divine". ❑ DIRA: 'orribile': cf. *SN* 10, p. 200 "carcer horrendus" (a cui si aggiungano i passi elencati da *Zingarelli*).

6. OVE ... CRIA: per il concetto cf. il passo di *SN* 18 cit. in n. a 136, 2-3 e *SN* 19, p. 236 "Ut videam bonos mergi, malos erigi?" e inoltre *Inf.* XIX 104-5 "ché la vostra avarizia il mondo attrista [cf. "il mondo tristo", v. 14], / calcando i buoni e sollevando i pravi". ❑ (I)L BEN MORE: cf. Guittone, *Lussuria, tu* 8 "affoga in onta *onni lor ben* e *more*" (Trovato, p. 72). ❑ CRIA: 'si crea': cf. 9, 12.

7. DI VIVI INFERNO: è espressione biblica (cf. *Nm* 16, 30 "descenderintque viventes in infernum"; *Ps* 54, 16 "et descendant in infernum viventes") a cui P. ricorre più volte per designare Avignone: cf., ad es., *Secr.* II, p. 120; *Fam.* XI 6, 5; 9, 2; XII 8, 10; 9, 5; XX 9, 2; 14, 28; *SN* 8, p. 194; 14, p. 215; *Inv. mal.* 10; in 345, 10 "questo inferno" designa la vita terrena (in opposizione a quella paradisiaca).

8. TECO ... S'ADIRA: cf. 356, 13.

9. FONDATA ... POVERTATE: per il concetto cf. 136, 2-3, 12-13; per l'espressione 146, 4; e inoltre Sennuccio del Bene, *Quand'uom si vede andar* 122 "*fondisi in umiltà* e in giustizia".

10. CONTRA' ... CORNA: cf. *Inf.* XXXIV 35 "e contra 'l suo fattore alzò le ciglia". ❑ FONDATORI: Cristo e gli Apostoli. ❑ ALZI LE CORNA: in atto di aperta ribellione. Le corna e il gesto di sollevarle sono simboli di superbia (cf. *Ps* 74, 6 "nolite extollere in altum cornu vestrum") e come tali già in 27, 3-4 sono stati collegati a Babilonia: "prese à già l'arme per fiacchar le corna (: torna) / a Babilonia" (cf. i rimandi in n.). Si ricordi che anche la "meretrix magna" di *Apc* 17 siede su una bestia "habentem ... cornua decem" (da cui anche Dante, *Inf.* XIX 109-10). Analoga la situazione di *TT* 65 "(i) miseri mortali alzan la testa".

11. PUTTA: la meretrice dell'*Apocalisse*, appunto, "puttana sciolta" in *Purg.* XXXII 149. ❑ SFACCIATA: che non ha "la paura del disnore ricevere per la colpa" (*Conv.* IV XIX 10): cf. anche "le sfacciate donne fiorentine" di *Purg.* XXIII 101. ❑ DOVE ... SPENE?: 'in chi o cosa speri? (dopo avere tradito i fondatori)': cf. 319, 6 e rimandi.

12. ADULTERI: le tresche con i re e i principi, come la meretrice "cum qua fornicati sunt reges terrae" (*Apc* 17, 2): cf. *SN* 18, p. 231 "Ex omnibus quidem fornicationibus tuis, de quibus biberunt omnes gentes et reges terre, et ex omnibus abominationibus quid expectes, nisi quod Joannes idem ait: Cecidit, cecidit Babilon magna et facta est habitatio demoniorum". Contini e la maggioranza degli editori stampano "adùlteri".

12-13. NE LE MAL ... TANTE: cf. *SN* 11, p. 202 "his male collectis et male fundendis divitiis"; *Inf.* XIX 98 "la mal tolta moneta" (al v. 115 "Ahi, Costantin, di quanto mal fu matre"); per il sintagma "mal nato" cf. anche *Inf.* V 7; XXX 48.

13-14. OR CONSTANTIN ... SOSTENE: vv. oscuri, di cui è difficile fornire una interpretazione soddisfacente (una esauriente rassegna di quelle proposte è in Ikeda, pp. 44-47): la più diffusa recita: 'Or Costantin non torna a mirare questi tristi effetti della sua donazione (oppure: 'a revocare la sua donazione' o ancora, ironicamente, 'ad accrescere le tue ricchezze'); ma egli abbiasi in mercede di essi l'inferno ["il mondo tristo"] dove si trova (oppure 'dove egli sta a patire')'. Questa lettura può appoggiarsi ai vv. 158-59 di *BC* VI "Eternum gemat ille miser [Costantino], pastoribus aule / qui primus mala dona dedit!", ma suscita non pochi dubbi linguistici e, soprattutto, trascura completamente il valore avversativo di "ma" (e infatti gli editori tendono a mettere due punti o un punto e virgola dopo "torna"). Una prima interpretazione che salvaguardi l'opposizione potrebbe essere: 'Costantino non tornerà a farti una seconda donazione, ma anzi si porti via il mondo corrotto che egli sostiene, mantiene, alimenta (con la sua elargizione)' (in questo caso bisognerebbe stampare "ch'el sostene"; il pronome "el" è attestato in 161, 10); una seconda: 'ma l'inferno si prenda chi lo difende' (per "che" = 'colui che' cf. 128, 73 e rimandi).

資料 II　池田廉訳『カンツォニエーレ－俗事詩編－』名古屋大学出版会 1992

一三八　ソネット

悲しみの湧き出る泉　怒りの棲む宿
誤謬の学舎（まなびや）　異端の殿堂、
昔はローマ　今や偽りと悪のバビロニア、
そのさまに　ひとは涙し嘆息する。

ああ　虚偽の坩堝（るつぼ）　おぞましき牢獄
そこに悪は生まれはびこり　正義が絶える、
生きとし生ける者の地獄、キリストの怒り
やがて汝に降らねば　魔訶不思議。

かつて純潔な清貧の中で　築かれた汝よ
なにゆえ今　創り主たちに逆らい　角を立て
歯向かうや　破廉恥な娼婦よ　いずれに望みを託す？

おもねる取り巻きにか？　不当な財宝にか？
ああ　コンスタンティヌスは戻りはしない、
邪な世など刈り取るがよい、天上の堪（た）えたまうなれば。

1 「悲しみの……」　悪徳の生きざまのために永遠の苦悩（地獄の罰）が待つ者どもの住み家（z）。キリスト教徒のこぞって嘆くところ（fa）。「怒り」　神の怒り（一三七）（i）。幸福のない、怒りや悲しみの満ちる処（z）。

2 「誤謬の学舎……」　多くの罪深い学説を生んだ処（c）。犯罪の学舎（z）。「異端の殿堂」　ヨハネ二二世の教義への作者の批判の表れ。つまり、正義の霊魂も、宇宙審判の後でないと、神の観照があり得ないとするその考えに対する批判（『近親書簡集』二・十二）（ca）。

3 「ローマ」　捕囚の前の、聖地ローマ。「バビロニア」　バビロン（悪徳に満つアヴィニョン）。

5 「虚偽の坩堝」　「裏切りの巣窟」（一三六）の類語。坩堝は産み出す源、の意。「恐ろしき牢獄」　キリストの聖体がアヴィニョンに囚われの身となったとの考え。

7 「生きとし生ける者」　よきキリスト教徒。

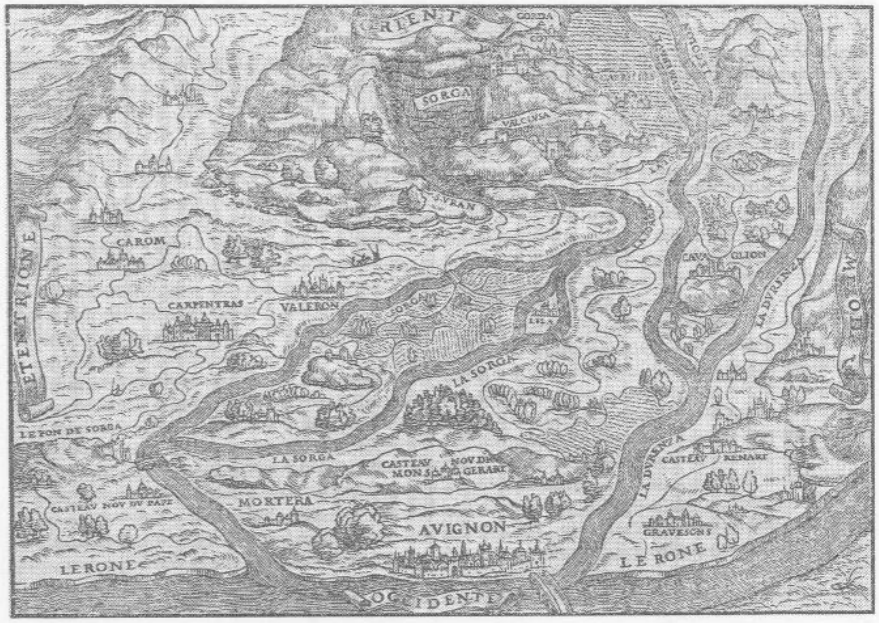
9 初期ローマ教会の昔を暗示（一三六）。

10 「創り主たち」　キリスト教使徒。「角立て」　反抗し。

11 「娼婦」　教皇庁の高位聖職者。「いずれに」　キリストと使徒たちのほかに。

12 「おもねる……」　高位聖職者（の罪悪）。「さあ来なさい。地の王が姦淫を行う大淫婦に対するさばきを見せよう」（『黙示録』十七・一～二）。

13～14　従来、意味不明の句でさまざまの解釈がある。



アヴィニョン周辺図（ジェズアルド版『ペトラルカ詩集』挿絵）

コンスタンティヌス帝よ、お前の寄進の惨めな結末をわざわざ見に来るにおよばない。今耐えている地獄で、そのまま苦しみを享受するがよい(*ca*、*c*)。ローマ教会の堕落の原因が、コンスタンティヌス帝の寄進に遠因があると詩人は考えて、もはやこれ以上コンスタンティヌス帝がお前を救いにかけつけてはくれない。なお、コンスタンティヌス帝の寄進への批判は『宛名のない書簡集』十七に(*z*)。原文 tolga（取り除く。ピエレッティ説では、棲む）と il sostene（それを支える、耐える）の語の解釈が、とくに問題とされた。前者を「取れ」と取り、いま地獄にあって苦しむがいい(*l*、*ca*、*c*、*z*)、邪悪な世界（地獄）を、キリストよ、除いてほしい(*v*、*g*)、キリストが支える地獄の世界を、取り除いて欲しい(*g*)、などの説。ここでは、「コンスタンティヌスはもう一度寄進を与えにお前を助けに戻りはしない。さあ、この悲しい世を取り除いて（自ら蒔いた種を刈り取って）ほしい。なぜなら、天上（キリスト）はこの（惨めな）世を我慢しておいでだから」（《諷刺》）と解する。なお、種を刈るの喩えは一八一・五、三六〇・一〇八～九に、また天上が望みたまわぬの意味の、類似の原因節は七〇・二七に見られる(*i*)。

資料 III　*Il PETRARCA*, con l'Espositione di M. Giovanni Andrea Gesvaldo, Vinegia, 1553.（ジェズアルド版、表紙・テキスト）

IL PETRARCHA

CON L'ESPOSITIONE
DI M. GIOVANNI ANDREA GESVALDO,
NVOVAMENTE RISTAMPATO, E CON SOMMA DILIGENZA CORRETTO,
CON NVOVA TAVOLA DI TVTTE LE COSE DEGNE DI MEMORIA, CHE IN ESSA ESPOsitione si contengono, & ornato di Figure.

IN VINEGIA APPRESSO GABRIEL GIOLITO DE FERRARI E FRATELLI. M D LIII.

me belle e di uirtuti amiche TERRANNO, habiteranno il mondo, essendo cacciate, e condannate le cattiue per purgare il mondo, ilquale Poi che sara de uitij spogliato, e fatto netto, uedremmo lui Aureo TVTTO, e pien de l'opre antiche, quali si dicono essere state al tẽpo di Saturno onde par che alluda, a quel che Lattantio hauer detto mostrato habbiamo. benche poteo quello, che colui intese a la fine del mõdo, egli al suo proposito trasferire. Ma permetta Iddio Signora mia illustrissima, che questo nuouo Soldano sia Carlo Quinto nostro Imperatore, ilquale habbia ad unire tutti i Christiani, & a rinouellare tutto il mondo si, che'l ueggiamo tutto aureo farsi, e pien de l'opre antiche: e basti in uendetta di Dio, & in punire le nostre offese l'estrema roina de la'nfelice Roma, del pouero Latio, de la misera Lombardia, e de la mal fortunata Napoli, Che questo anno Millesimo cinquecentesimo uigesimosettimo per guerra, per peste, e per fame patito, e ueduto habbiamo.

Fontana di dolore, alberbo d'ira,
Schola d'errori, e tempio d'heresia
Gia Roma, hor Babilonia falsa e ria;
Per cui tanto si piagne, e si sospira;
O fucina d'inganni, o pregion d'ira;
Oue'l ben muore, e'l mal si nutre e cria;
Di uiui inferno; un gran miracol fia,
Se Christo teco al fine non s'adira.
Fondata in casta & humil pouertate
Contra tuoi fondatori alzi le corna?
Putta sfacciata; e dou'hai posto spene?
Ne gli adulteri tuoi, ne le mal nate
Ricchezze tante? hor Constantin non torna.
Ma tolga il mondo tristo che'l sostiene.

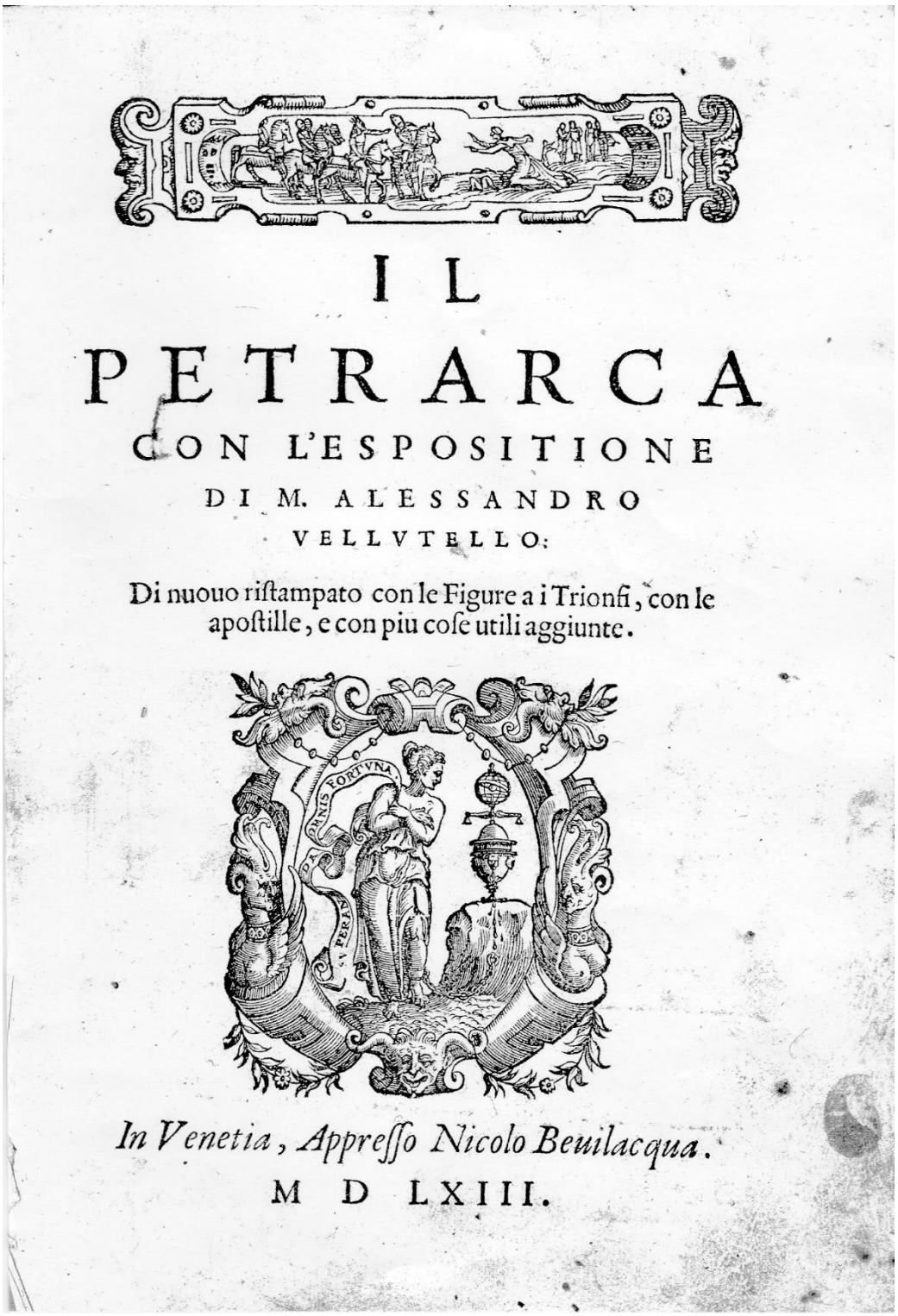
NE questo nõ è contra i chierici, la costoro città, ch'a quei tempi era Auignone, altresi Babylonia chiamando per le dette altroue ragioni: E contra lei insorgendo egli dice, FONTANA, principio di dolore, cio è cagione ch'altri si doglia assai, ALBERGO e ricetto d'ira humana, essendo egli habitatori suoi pieni di sdegno, e di furore, e d'odio, mastimamente il Pontefice, che terribilmente irato s'era contra Italia, e la roina di lei cercaua, ouero d'IRA di Dio, si come ne l'altro Sonet. Schuola d'ERRORI, ch'a dire il uero non ui s'imparaua il uero colto diuino, ma graui errori ne la santissima nostra fede, E tempio d'HERESIA, alludendo a quel che'l Firmiano, e gli altri di Babylonia scrissero, che da lei uenne l'idolatria, e le false credẽze di Dio, che si dicono heresie: ma mentre la chiesa apostolica fu in Auignone, nacquero alcune discordie tra Christiani, che scisma ti chiamano, ne senza qualche heresia: anzi i prelati stessi, ch'erano in Auignone, poco, o niente credeano in Dio. Vbi, come disse il Poe. ne la. xiij. Epist. nulla pietas, nulla charitas, nulla fides habitat: ubi tumor, liuor, luxus, auaritia cum artibus suis regnant: Vbi Deus spernitur: adoratur numus: Gia ROMA per adietro, quando la sede apostolica iui era, e li animi nõ corrotti da uitij, ma netti, e chiari, e d'alta uirtute accesi. HOR ch'ella è in Auignone, e i cherici lasciando Christo han fatto signore l'auuersario di lui, BABYLONIA citta di confusione, si come il nome significa, FALSA, ingannatrice, e RIA, e graue, e dannosa, per laquale tanto si piagne e si sospira, mastimamente in Italia. O fucina d'INGANNI, oue si trattano, e fabricano inganni, si come a la fucina si fabricano l'arme, & altre oure di ferro. O prigion DIRA, o prigione crudele e fiera, si come ne la. xij. Epistola, oue laberintho la chiama dicendo, Non hic carcer horrendus, non tenebrosæ domus error, nõ fatalis una humani generis fata permisceris. Deniq; non imperiosus Minos, non Minotaurus uorax, non damnatæ Veneris monimenta defuerunt. OVE ne laqual prigione il Ben MVORE, sta ne la metaphora, che in prigione si muore souente, & a lo'ncontro SI CRIA, e nutre il male: conciosia ch'iui spenta era ogni uirtute, e i uitij regnauano. Di uiui INFERNO, come se null'altra differenza tra lo'nferno fosse, & Auignone, se non ch'egli è de morti, e questo era de uiui. Vn gran miracol FIA, se nõ si legga per interpositio, Fia, sara il uerbo principale di questo membro. Ma se ui piaccia, che sia interpositione, il uerbo principale di tutto il Son. sarebbe Alzi, e dopo questo, hai posto: Vn gran miracolo sara se CHRISTO, come giusta persona, anzi il Sol di giustitia TECO conte Al FINE come uinto da l'offese di lei, che piu patir nõ puo, Non s'ADIRA si, che portartene faccia pena, che pariuada col peccato. FONDATA essendo tu da Christo, e da li apostoli in humile pouertate, Contra tuoi FONDATORI, che poueramente uiuendo uolsero, che pouerta seruar si douesse da loro seguaci, Alzi le CORNA superba, & altiera ne le tue ricchezze ridandoti sei fatta contra l'ordine de tuoi fondatori. Putta SFACCIATA, e senza uergogna, onde apo i Latini, Per fricuit frõtem chi non si uergogna: e Greci dicono, ἀιδοῖς ὠφθαλμοῖς, la uergogna è nel uiso. adunque chi è sfacciato, non ha uergogna: e sia il punto interrogatiuo per accrescer lo sdegno la Alzi le corna: e poi con quell'accento segua Putta sfacciata, che apo Homero Νήπιε, dopo il sentimẽto perfetto di sopra, & apo Virgilio stultus, ouero infelix: benche cotesto muoua piu tosto pieta, che sdegno: ma l'uno e l'altro riprende; & è come dicono i Greci, ἐπιπληκτικόν, E dou'hai posto SPENE, a gran riprensione, ne li adulteri TVOI, essendo che'n lei lussuria fa l'ultima pruoua, come s'è detto ne l'altro Son. Ne le mal NATE, perche mal per noi nacquero, come cagioni sole di tutti i nostri danni, onde l'auaritia disse Catone esser madre di tutti i uitii, Ricchezze TANTE hai posto spene? O cieca e uana speranza, che gia per l'altrui impouerir, se ricca e grande, Hor Constantin non TORNA, come s'egli uolesse che Costantino tornasse, perche tornando, e ueggendo il suo duono di quanto mal sia stato

principio, se ne pentirebbe, e si studierebbe riuocare, e rompere la fatta donatione: benche perauuentura nulla mutar ne potrebbe. pero soggiunge, MA, perche Costantino non torna, ne, se tornasse, potrebbe punto de lo stato guasto che trouerebbe, cangiare, TOLGA, toglia il mōdo TRISTO, graue e noioso Che'l SOSTIENE Christo intendendo, che'l sostiene e regge. Altri leggono Che'l sostiene, cioè ma tolga Christo il mondo tristo, CHE'l ilquale cotesto, cioè questo uituperio sostiene e porta: Altri dicono, ma tolga il mondo tristo CHE'l, quello, che'l sostiene, & intendi come prima Christo. peroche egli ne la. xix. Epist. hauendo ripreso Costantino, che si imprudentemente hauea guasto il Romano imperio per lo duono, ch'egli si dice hauer fatto a l'apostolica chiesa, al fine cosi li dice. Sed an hæc audias ignoro; & certe si audias, frustra sit. Fecisti enim quod neque si redeas, mutare possis. Instauraror fundatori, quam euersori similior sit oportet, Tu Christe, qui potes, a quo imperia omnia, & in terris, & quæ sursum, & quæ deorsum sunt, precario possidentur, qui hanc meam et maxime publicam querelam uel in silentio audis, exaudi quæsumus, si iusta est. Altresi Dante a Costātino uolgendosi dice. A i Costantino di quanto mal fu madre, Non la tua conuersion, ma quella dote, Che da te prese il primo ricco padre, nel. xx. canto de lo'nferno. Ma quanta fosse questa dote e quale il Poe. par che segua la uolgare oppenione, che Costantino donasse a la Romana chiesa gran parte del Romano imperio, hauendosi egli per sua e de suoi successori imperiale regia fatta, Costantinopoli in Thracia. peroche ne l'allegata Epist. egli dice. O inconsulte princeps ac prodige, ne sciebas quantis laboribus constaret imperium, quod tam facile dispergebas? e poco dapoi. Si uidere munificum delectabat, de proprio largireris, tuam donasses, imperii hæreditatem, quam curator acceperas, successoribus integram reliquisses. Ma nullo historico e non pur de Gētili, ma de nostri, non Orosio, non Europio, non Paulo Diacono, non quelli che diligentissimamēte scrissero le cose di Costantino di tāto duono fecero mai parola. Socrate, e Solomone, e Platina, che le cose de pontefici da costoro e da glialtri scritte raccolse, non altra dote mostrarono esserne stata che alcune rendite lequali oltra i tanti ornamenti di diuersi metalli, egli a ciascuna Basilica da lui fatta in honore & aumento de la nostra religione, che molte ne fece, diede, affine ch'e cherici si potessero sostenere. aggiunseui un certo rendito uso a pagarsi da le citta, ilquale parti a le prouinciali chiese, & a cherici: ilqual duono uolle con authorita di suo decreto, che stabile e fermo fosse, & eternamente ualer douesse. Concedette ancora, che le uergini donne, e gli huomini senza donne potessero far testamento; e uolendo, a sacerdoti parte de l'heredita lasciare. Di che si stima che'l patrimonio de la chiesa ito auanzando sia Ma i popoli, e le citadi, e le castella, che'l Pontefice in Italia possiede sotto il nome di patrimonio, le si donarono dal Magno Carlo primo de Frācesi Romano Imperatore, ouero, com'altri scrissero. dal padre Pipino, e da lui le si confermarono, che far lo potè, perche molti anni addietro l'imperatori, ch'a quei tempi a Cōstantinopoli faceano seggio, hauendo abbandonate le cose di Roma, e d'Italia, non curando, che da Barbari s'occupassero, e si consumassero, i pontefici Romani n'hauean la miglior cura. ch'essi poteano, e spesse uolte al bisogno chiedeuano a i Cesari il soccorso: iquali trouando pigri, & ignaui. come se di cio loro niente calesse, si riuolsero a glialtri prencipi Christiani, e massimamēte a quei di Francia. onde quando Luitiprando Re de Longobardi hauendo intorno a Roma citta e castella tutte prese, lei ultimamēte asseggiata tenne, Greg. iii. nō a Leone Imperatore, ilquale scomunicato hauea, ma chiese aita a Carlo auo del Magno gia de Francesi prencipe: ilquale operò che i Longobardi da l'assedio di lei si partissero. Poi contra Astolpho de la medesima gēte Re. ch'Italia affligendo andaua, e gia Rauenna, e grā parte da Flaminia preso hauea, Stephano secondo fu da Pipino airato, e parimente liberato da l'assedio, quando egli intorno a Roma pose il campo, ond'hebbe in duono da lui il pontefice quanto i Longobardi tolto hauean a Romani dal Po in qua. Indi Carlo Magno non solamente fe uendetta de le ingiurie del primo Adriano, prendendo il Re Desiderio, e spengendo il regno de Longobardi; ma confermò il duono del padre. ond'egli meritò per tāti suoi e de predecessori benefici, da Leone. iii. hauer corona del Romano imperio, & Imperatore nomarsi nei. Dcclxxvi. si come il padre impetrò dal primo Zacharia, che col nome di Re si confermasse nel regno di Francia per authorita del Papa nei. Dcclii. sono alcuni, iquali scriuono, benche senza degno authore, Antipetro Re de Longobardi hauer donato a San Pietro l'alpi cottie, e cioche da Taurini e Medulini fin al Genoese si stēde. Altri afferma no il duono esser stato da lui confermato. Ma bisognaua dir prima chi fatto l'hauea. Questo è quel che per adesso basti hauer detto di si famosa e diuulgata per tutto il mondo dote.

Quanto piu distose l'ali spando
Verso di uoi o dolce schiera amica;
Tanto fortuna con piu uisco intrica
Il mio uolare, e gir mi face errando.
Il cor; che mal suo grado atorno mando;
E' con uoi sempre in quella ualle aprica,
Oue'l mar nostro piu la terra implica:
L'altr'hier da lui partimmi lagrimando;
I da man manca; e tenne il camin dritto;
I tratto a forza, & e d'amore scorto:

He'l Poe. scriuesse a quella dolce schiera amica, co la quale esser diliaua in Valchiusa, egli e piu chiaro, ch'a noi prouarlo bisogni. Ma quando, & oue, è tāto dubbio, ch'io non saprei daruene certa fermezza. Alcuni dissero, che'l Poe. per ritrouarsi gia a seruigi del. xxii. Giouanni, essendo ad uopo de lo stesso pontefice la oue mette il Rhodano, perche andar douea a trouare alcuni suoi amici in Valchiusa, ou'essi l'aspettauano, ne poteo per qualche necessita, che gli auuenne di ritornare al Papa, scrisse loro per iscusarsene. Ma costoro presoppongono quello che non è uero, o per dir meglio, quel ch'è senza

資料 IV　*Il PETRARCA*, con l'Espositione di M. Alessandro Vellvtello, Venetia, 1563.（ヴェルテッロ版、表紙・テキスト）



IL

PETRARCA

CON L'ESPOSITIONE

DI M. ALESSANDRO

VELLVTELLO.

Di nuouo riſtampato con le Figure a i Trionfi, con le apoſtille, e con piu coſe utili aggiunte.

In Venetia, Appreſſo Nicolo Beuilacqua.

M D LXIII.

Sol due persone chieggio; e uorrei l'una
Col cor uer me pacificato, e humile;
L'altro col piè, si come mai fu, saldo.

corte, come nella seguente Canzone uedremo, egli ardeua, Ma solamente due persone mostra desiderare, dellequali l'uno uorrebbe, che fosse col cuore uerso di lui humile e pacificato, e questa è M.L. l'altro col pie nel suo stato come fu mai saldo, e questo è il Signore Stefano Colonna il giouene, che per trouarsi in quei tempi co glialtri Colonnesi da suoi nimici Orsini fuor di Roma cacciato, non era col pie saldo nel stato, come desideraua che fosse. Stefano Colōna il giouane.

FIAMMA *dal ciel su le tue treccie pioua*
Maluagia; che dal fiume, e da le ghiande
Per l'altrui impouerir se' ricca, e grande,
Poi che di mal oprar tanto ti gioua:
Nido di tradimenti, in cui si coua,
Quanto mal per lo mondo hoggi si spande,
Di uin serua, di letti, e di uiuande;
In cui lusuria fa l'ultima proua,
Per le camere tue fanciulle, e uecchi
Vanno trescando, e belzebub in mezo
Co mantici, col fuoco, e con li specchi.
Gia non foste nudrita in piume al rezzo:
Ma nuda al uento, e scalza fra li stecchi.
Hor uiui si, ch'à Dio ne uenga il lezo.

IL presente Sonetto giudichiamo essere stato fatto dal Poeta in quel tempo medesimo ch'egli si partì da seruigi del Pontefice e dalla corte, come nel precedente detto habbiamo, nel quale similmente contra d'essa corte insurge biasmandola generalmente di tutti i uitij, ma in specialità di rapina, di tradimento, di gola, e di lussuria, dimostrando che'l suo principio non fu d'esser nutrita in tante delicatezze, com'alhora in quella si uiuea, ma in somma inopia & pouertà, la uita di Christo imitando, Onde riprende la uituperosa lasciuia di quei lussuriosi uecchi prelati, quali con le giouenette fanciulle meretrici andauano per le camere trescando, come d'uno Cardinale in una sua epistola referisce, & Belzebub in mezo, cioè lo sfrenato appetito lasciuo fra loro, co mantici, & col fuoco, per accender in loro mediante l'esca delle uiuande incitatiue, la concupiscentia, carnale, che da gli anni senili suol essere spenta, E con li specchi, iquali per meglio ogni suo uergognoso membro mirare, usano nelle camere tenere, dellaqual cosa Eschine, & Seneca soleuano Timarco dannare. Prelati lussuriosi.

FONTANA *di dolore, albergo d'ira,*
Scola d'errori, e tempio d'heresia,
Gia Roma, hor Babilonia falsa, e ria:
Per cui tanto si piagne e si sospira;
O fucina d'inganni, o prigion d'ira;
Oue'l ben more, e'l mal si nutre e cria;
Di uiui inferno; un gran miracol fia,
Se Christo teco al fine non s'adira.
Fondata in casta, & humil pouertate
Contra tuoi fondatori alzi le corna
Putta sfacciata; e dou'hai posto spene?
Ne gli adulteri tuoi; ne le mal nate
Ricchezze tante? hor Constantin non torna:
Ma tolga'l mondo tristo, che'l sostene.

SEGVITA il Poeta nel presente Sonetto come ne due precedenti ha fatto, in biasimare i sozzi uitij della Romana corte. Costantino Imperadore fu il primo, che dotò la Chiesa, poi che da Siluestro Papa fu fatto christiano, Ma lo fece perche al culto diuino con piu ornato apparato, & graui cerimonie si potesse proceder, essendo la Chiesa per adietro stata i somma pouertà, & nō perche tal dote si cōuertisse nel pessimo uso ch'alhora si conuertiua. Onde Dante nel. xix. de l'Infer. Ai Constantin di quanto mal fu matre, Non la tua conuersion, ma quella dote, Che da te prese il primo ricco patre. Dice adunque Dante.